

# 木

## 「違い」による差別 葛藤を丁寧に綴る

坂本洋子

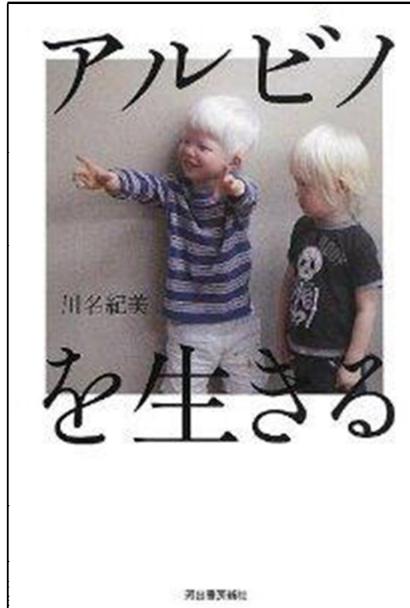
さかもと ようこ/mネット・民法改正情報ネットワーク代表

ある。

著者の当事者に寄り添う優しい眼差しと表現力に、ルポではあるが、長編小説を読んでいるような深さを感じた。読了後には言いようのない清々しさにも似た感覚が湧いてきた。

まさに、プロの仕事がここに付くかどうかの鍵である。

「彼らが自分らしい人生をまつとうできるように、変わらなくてはならないのは私たち多数派の方だ」との著者の投げかけは、日本社会でダイバーシティが根付くかどうかの鍵である。



『アルビノを生きる』

川名紀美=著 河出書房新社

2310円 ISBN978-4-309-02191-1

メラニン色素の欠乏により髪や肌が白くなる「アルビノ」と呼ばれる人々もまた、長い間排除されてきた。アルビノは一万人から二万人に一人の割合で現れる遺伝性の疾患であることはわかつてきた

といふ言葉が使われ始めて久しいが、日本社会の「同質」を重んじる文化にあって、「違い」はしばしば攻撃や排除の対象とされがちだ。

ダ イバーシティ（多様性）といふ言葉が使われ始めても、彼らは合併症と闘い、差別や偏見に晒され、家族や親族との軋轢にも苦しみ、孤立させられてきた。

本書は、『朝日新聞』論説委員からフリージャーナリストとなつた著者が、四年の歳月をかけ、アルビノの人たちの生き様や葛藤を乗り越えていく様子を丁寧に綴ったルポである。

アルビノとして生まれたため、自身と家族はもとより、父と母、祖父と母、母と兄との間の軋轢に、幼いころから向き合わざるを変えなかつた石井更幸さん。彼を中心に、アルビノとして生まってきた人たちが、困難に直面しながら交流の場を求める、繋がっていく。実名で登場するアルビノの人々の心の叫びはリアルに読み手の心に響いてくる。

「彼らが自分らしい人生をまつとうできるように、変わらなくてはならないのは私たち多数派の方だ」との著者の投げかけは、日本社会でダイバーシティが根付くかどうかの鍵である。